鹿児島県総合教育センター

令和２年度長期研修研究報告書

研　究　主　題

問題解決的な学習における「思考力，判断力，表現力等」を育む社会科学習指導の在り方

－児童自ら知識をつなぐ振り返りの場面に基づいた授業設計を通して－

垂水市立垂水小学校

教　諭　盛岡　佑子

目　次

Ⅰ　研究主題設定の理由・・1

Ⅱ　研究の構想
　１　研究のねらい・・・1
　２　研究の仮説・・1
　３　研究の計画・・1

Ⅲ　研究の実際
　１　研究主題についての基本的な考え方
　　⑴　問題解決的な学習における「思考力，判断力，表現力等」について・・・・・・・・・・・2
　　⑵　「社会的事象の見方・考え方」を働かせた問いと単元構想について・・・・・・・・・・3
　　⑶　知識をつなぐ振り返りについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　２　研究の視点
　　⑴　思考方法の活用と思考の可視化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　　⑵　児童自ら問題解決を図る学習過程と問いの工夫・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　　⑶　知識をつなぐ振り返りの工夫・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
　３　児童の実態
　　⑴　実態調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
　　⑵　実態調査の分析と考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
　４　検証授業Ⅰ（第４学年「ごみのしょりと利用」）の実際と考察
　　⑴　検証授業Ⅰの概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
　　⑵　単元計画・・10
　　⑶　検証授業Ⅰの考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
　　⑷　検証授業Ⅱに向けての改善・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
　５　検証授業Ⅱ（第４学年「のこしたいもの　つたえたいもの」）の実際と考察
　　⑴　検証授業Ⅱの概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　　⑵　単元計画・・14
　　⑶　検証授業Ⅱの実際と考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

Ⅳ　研究のまとめ
　１　研究の成果・・・23
　２　研究の課題・・・24

※　引用文献・参考文献

Ⅰ　研究主題設定の理由

現代社会は，様々な分野で急速にグローバル化が進み，刻一刻と変化している。児童の身の回りに起こる様々な社会的事象も変化を続け，実に多様化してきている。この予測困難な時代だからこそ現代社会に生きる公民として，主体的に考え，判断し，行動することが望まれる。このような社会の現状を背景に学習指導要領の改訂が行われた。その中で資質・能力が「知識及び技能」，「思考力，判断力，表現力等」，「学びに向かう力，人間性等」の三つに整理された。これら三つの資質・能力を身に付けさせるために，「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善が求められている。小学校社会科では，公民としての資質・能力の基礎を育成することを目標とし，社会的事象の意味や意義，特色や相互の関連を考察し，課題解決に向かうために「社会的事象の見方・考え方」（中学校・高等学校では「社会的な見方・考え方」）を働かせ，課題を追究したり解決したりする「問題解決的な学習」をより一層充実させることが求められている。

これまで本校の児童は，社会科の学習において「知識・理解」が十分に身に付いていないことやグラフ等から分かったことや学習を通して獲得した学びを自分の言葉で表現することに課題があった。また，自身の授業においても教科書に掲載されている，一部を対象とした限定的な社会的事象を理解させるばかりで，断片的知識の習得にとどまっているという課題があった。これにより，児童は学んだ知識がつながらずに，応用できなかったり，表現できなかったりするのではないかと考えた。

そこで本研究では，まず児童自ら問いを見いだし，追究しようとすることで深い学びを実現させるために児童主体による問題解決的な学習を単元の中で具体化していく。次に，獲得した知識をつなぎ，関係付けることで，知識を構造化させ，学んだことを生かして適切に表現し，判断させるために思考力，判断力，表現力等の育成について研究していく。さらに，学習内容を活用して考えを表現したり，学んだ知識をつなげたりするための振り返りの場について検討していく。

このような研究を通して，児童が知識を単なる事実の羅列ではなく，相互に関連付いた生きて働く知識（概念）として獲得し，社会生活についてのより深い理解や思考，意欲等を得ることにつながるものであると考え，本研究の主題を設定した。

Ⅱ　研究の構想

１　研究のねらい

⑴　問題解決的な学習における「思考力，判断力，表現力等」の育成について研究する。

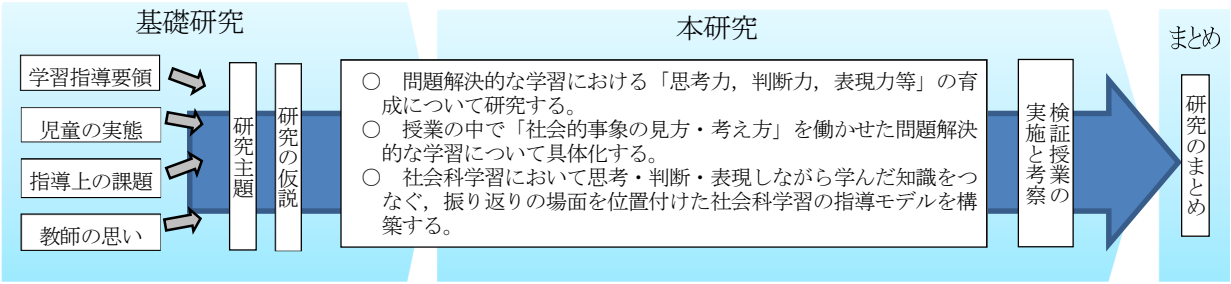
⑵　授業の中で「社会的事象の見方・考え方」を働かせた問題解決的な学習について具体化する。

⑶　社会科学習において思考・判断・表現しながら学んだ知識をつなぐ，振り返りの場面を位置付けた社会科学習の指導モデルを構築する。

２　研究の仮説

社会科における「社会的事象の見方・考え方」を働かせた問題解決的な学習を授業の中で具体化し，知識をつなぐ振り返りの場面において効果的な指導を行うことで，児童の「思考力，判断力，表現力等」を育むことにつながるのではないか。

３　研究の計画



Ⅲ　研究の実際

1　研究主題についての基本的な考え方

⑴　問題解決的な学習における「思考力，判断力，表現力等」について

文部科学省[*1)](2018)が示した小学校学習指導要領解説社会編では，「思考力，判断力，表現力等」を次のように定義している。「小学校社会科における『思考力，判断力』は，社会的事象の特色や相互の関連，意味を多角的に考える力，社会に見られる課題を把握して，その解決に向けて学習したことを基に，社会への関わり方を選択・判断する力である。『表現力』とは，考えたことや選択・判断したことを説明する力や，考えたことや選択・判断したことを基に議論する力などである。その際，資料等を用いて作品などにまとめたり図表などに表したりする表現力や，調べたことや理解したことの言語による表現力を育成することも併せて考えることが大切である。」

これらの力がどのような場面で育成されるかについてまとめると**表１**のように示すことができる。

表１　「思考力，判断力，表現力等」を育成する学習活動の場面と具体的活動（文部科学省教育課程部会 2018 言語能力の向上に関する参考資料を基に筆者が作成）

	学習活動の場面	具体的活動
思考力　判断力等	①　目標を設定する。	①　これから解決を図ることのねらいを自分で設定し，明確化する。
	②　目標を達成するための見通しをもつ。	②　めあての解決を図るためには，どのような方法でどのような情報を集めればいいかの方向付けをする。
	③　目標の達成に向けて情報を収集する。	③　めあてに沿って，文章を読んだり，映像を見たり，グラフやデータを分析したり，ものを観察したりするなどして，様々な情報を得る。
	④　見通しと得られた情報を関連付ける。	④　得られた様々な情報を，学習問題やめあての解決を図るための見通しと結び付ける。
	⑤　集めた情報を比較したり，分類したり，これまでの知識等と関連付けたりする。	⑤　集めた情報を比較したり，分類したり，総合したり，これまでに学んだ知識や経験などと共通点や違いを見いだしたり，多角的に考えることでこれまでに築いてきた知識と結び付けたりする。
	⑥　情報に重みを付けたり，価値付けたりする。	⑥　問題解決を図るために，重要なもの，意味があるもの，自分たちが協力できるものを選択し，判断する。
	⑦　知識の再構築を図る。	⑦　新しく分かったことを加えて知識の再構築を図る。
	⑧　自分の生活に生かそうとする。	⑧　自分にできるものを選択し，社会の一員として社会生活に生かそうとする。
表現力	①　見通しをもつために表す。	①　問題解決を図るためには，どのような方法でどのような情報を集めればよいかを，文章や図表などで表す。
	②　思考の過程において表す。	②　思考を進める中で，得られた情報を整理し，そこから分かったこと，考えたこと，疑問に思ったことなどを表す。
	③　分かったことを伝えるために表す。	③　様々な働き掛けで得られた情報を，整理したり，選択・判断したことを説明したり，議論したりして伝え，表現する。

＊1）　文部科学省　『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　社会編』　2018　日本文教出版

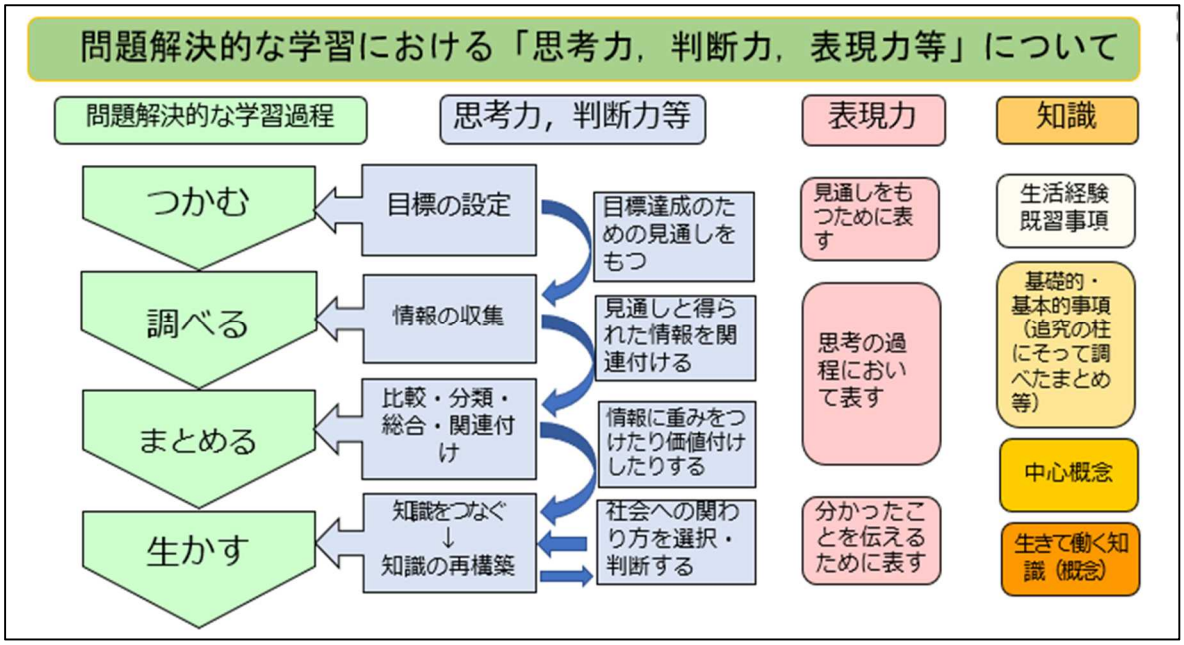


図１　単元における問題解決的な学習と「思考力，判断力，表現力等」と知識の関連の構造図
栃木県総合教育センター「思考力・判断力・表現力」を育む授業づくり【理論編】2015
を基に筆者が作成

表１では，「思考力，判断力等」と「表現力」を分けて示したが，実際は問題解決的な学習過程の中で相互に関連し，育成されていくものと考えられる。

また，文部科学省[*1)]（2018）小学校学習指導要領解説社会編では，問題解決的な学習について次のように定義している。「問題解決的な学習とは，単元などにおける学習問題を設定し，その問題の解決に向けて諸資料や調査活動などで調べ，社会的事象の特色や相互の関連，意味を考えたり，社会への関わり方を選択・判断して表現し，社会生活について理解したり，社会への関心を高めたりする学習などを指している。」**図１**は，単元における問題解決的な学習過程と「思考力，判断力，表現力等」と知識の関連をあてはめて構造化したものである。「つかむ」では，児童自身が目標を設定し，これまでの生活経験や既習事項から予想を立てることで見通しをもつ。「調べる」では，予想や見通しの下，情報を収集する。また，得られた様々な情報を見通しと関連付けながら学びを調整していく。「まとめる」では，収集した情報を比較・分類したり，総合したり，関連付けたりすることを通して，重要なものや意味があるもの等に情報を価値付けることで，児童は社会的事象の特色や意味，相互の関連等を理解していく。その際，児童の思考を可視化するためには，学習内容に応じた思考ツールの活用が有効である。「生かす」では，これまでの学習内容をつなげ，知識の再構築を図る。これからの社会への関わり方について考え，選択・判断させることで，概念的な知識に高める。このような一連の学習過程の中で，教師は，どこで，どのように思考を促し，選択・判断したことを表現させるかを構想することが大切である。

⑵　「社会的事象の見方・考え方」を働かせた問いと単元構想について

ア　社会的事象の見方・考え方とは

学習指導要領の改訂で社会科における見方・考え方は，小学校では「社会的事象の見方・考え方」と整理し直された。これは，社会的事象の意味や意義を確かに捉えさせ

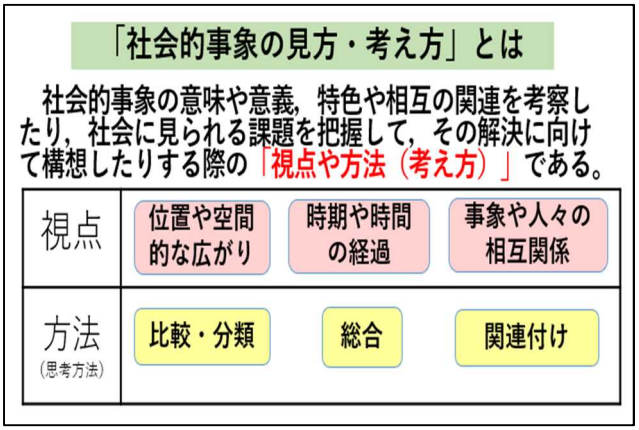


図２　社会的事象の見方・考え方

るために，見方（着目させる視点）と考え方（思考方法）を具体化したものである。位置や空間的な広がり，時期や時間の経過，事象や人々の相互関係に着目して社会的事象を捉え，比較・分類したり，総合したり，関連付けたりすることである（**図２**）。

イ　「社会的事象の見方・考え方」を働かせた問いと単元構想について

社会科では，見方（視点）に着目し，考え方（思考方法）を使って社会的事象を考察し，追究する学習活動が大切である。そのため，児童が社会的事象の見方・考え方を働かせるためには，教師が視点を生かした問いを構想し，どのように単元を組み立てていくかが重要である（**表２**）。児童の社会認識の深まりの度合いは，学習課題の問い方によって変わるため，社会科において取り組ませるべき課題は，社会認識形成の段階に応じて設定することが大切である。まず，教師が単元のねらいを踏まえた社会的事象に意図的に出合わせることで，児童に「なぜ」，「どうして」という問題意識をもたせ，児童と協働で単元における学習問題を設定する。次に，児童が学習問題の予想をすることを通して教師は調べる内容や方法についての見通しをもたせる。そして，「いつ」「どこで」「誰が」「何を」といった社会的事象の事実を問うことで，具体的知識として直接的に導く。次の段階では，「なぜ」と問うことで調べた個々の事実をつなげ，社会的事象間の因果関係や特色や意味について考察させ，中心概念に関わる知識を習得させる。さらに，「どうすれば」や「どうすべきか」と問うことで，社会的事象について学んだことを活用して，より深く考察させることで，概念に関わる知識の再構築を図る。その際には，児童自身が学んだことを活用して選択・判断させる場を設定したり，選択・判断したことを表現させたりする場の工夫が大切である。このように問いを構想し，組み立てることで，児童は知識を構造化させ，概念的な知識を獲得することができる。

表２　学習過程における問いと知識の関連

主な学習過程			視点を生かした「問い」の例	社会的事象についての知識
つかむ	動機付け	●　単元を通した学習問題を設定する。	・　なぜこの地域は○○が多いのだろうか。 ・　どうして○○をしているのだろうか。	主として事実等に関わる知識を習得する。
	方向付け	●　問題解決の見通しをもつ。	・　何を使って調べたらよいだろうか。 ・　学習問題の答えはどうなるのだろうか。	
調べる	情報収集	●　予想や仮説の検証に向けて調べる。	・　誰が，いつしているのだろうか。 ・　どこで行われているのだろうか。	
	考察・構想	●　社会的事象の意味や意義，特色や相互の関連を考察する。	・　なぜこの地域だけ増加したのだろうか。 ・　なぜこの場所に集まるのだろうか。	中心概念に関わる知識を習得する。
まとめる	問題解決	●　考察したことや構想したことをまとめる。	・　どうすれば問題を解決できるだろうか。 ・　自分たちにできることはないだろうか。	
生かす	新たな問題	●　学習を振り返って考察する。	・　どのように続けていくのがよいのだろうか。 ・　共に生きていく上で何が大切なのだろうか。	概念に関わる知識の再構築をする。

⑶　知識をつなぐ振り返りについて

ア　社会科において知識をつなぐとは

図３は，知識の理解の質を高める様子をイメージした図である。事実に関わる新たな知識が，既得の知識とつながることで，概念的・構造的な知

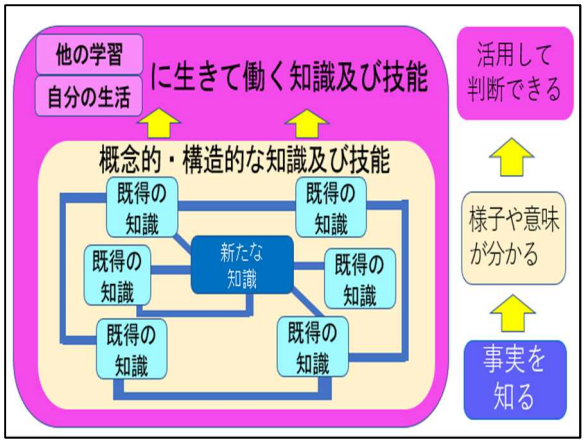


図３　知識の理解の質を高めるイメージと社会認識の段階（鹿児島県総合教育センター指導資料社会第 132 号を基に筆者が作成）

識に高まり，他の学習や生活の場面でも活用できる確かに生きて働く知識となる。社会認識の段階で言えば，まず，身近な社会的事象の事実を知る段階から，事実同士の関連や因果関係等を含めた様子や意味が分かる段階へと進む。そして，学んだことを活用して判断できる段階へと高まると言える。このように既に有している概念をより強固なものにしたり，知識の再構築をしたりすることにつなげるためには，知識をつなぐことが必要である。社会科の授業で取り上げられる知識には，様々なレベルのものがある。**図４**に示してあるように，用語・語句，具体的知識等の基礎的・基本的事項，中心概念に表される概念的知識である。児童は１単位時間で習得した具体的知識を積み重ねていくことによって，単元終末では，それらの具体的知識を活用して，中心概念を獲得する。このように，多様な知識を階層的につなげ，整理することによって，教師は，授業のゴールを明確にイメージすることができるとともに，児童の概念的知識の習得につなげることができると考える。これは，教師だけでなく児童も同様である。身に付けた知識や技能をつなげることで中心概念の獲得により近づいたり，社会的事象について多角的に考えたり，選択・判断したりすることができるのである。つまり，毎時間の授業において，具体的知識を確かに獲得させ，単元終末において児童が具体的知識をつなげることで中心概念の内容を理解させることが必要である。そのためには振り返りが有効である。

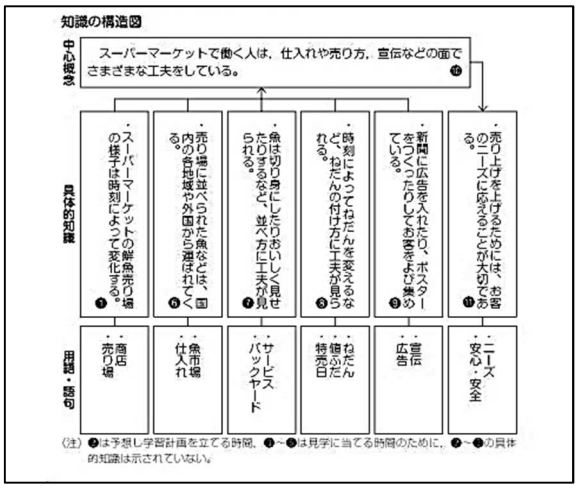


図４　知識の構造図『“知識の構造図”を生かす問題解決的な学習の授業づくり』北俊夫著*2) より引用

イ　振り返りとは

田村*3)(2018)は，振り返りの機能について三つの機能を挙げている（**図５**）。①では，学習内容を確認することで，自己の学びをより確かなものにしたり，めあてや見通しに対して自己の学びはどうだったかを振り返ったりすることができる。②では，学習内容を現在や過去の学習内容と関係付けたり，一般化したりすることで，児童は理解の質を高め，概念的知識の獲得につなげることができる。また，③では，児童が学習内容を自らとつなげ，自己変容を自覚することで児童は，達成感や成就感を実感し，新たな学ぶ意欲につなげることができる。そのためには，振り返りで文字言語によって学びを刻み，記録を残しておくことが大切である。

振り返りの機能

①　学習内容や方法を確認する振り返り
・　復習，再生，おさらい
②　学習内容を現在や過去の学習内容と関連付けたり，一般化したりする振り返り
・　関連付け，概念化・構造化
③　学習内容を自らつなげ自己変容を自覚する振り返り
・　自身の成長，主体的に学ぶ姿

図５　振り返りの機能（田村（2018）を基に筆者が作成）

２　研究の視点

⑴　思考方法の活用と思考の可視化

小学校学習指導要領解説社会編では，社会的事象を考察する際の考え方を比較・分類，総合，関連付けの三つを示している。これらを問題解決のための思考方法として，そのよさを実感し，児童が適切に活用することができるようになれば，児

図６　教室掲示用カード

*2)　北俊夫著　『知識の構造図を生かす問題解決的な学習の授業づくり』　2015　明治図書出版
*3)　田村　学　『深い学び』　2018　東洋館出版社

童の思考力，判断力等を育むことができるのではないかと考える。そこで，児童に分かりやすくするために，比較を「くらべる」，分類を「わける」，関連付けるを「つなぐ」として言語の掲示用カード（**図６**）や板書用マグネットを作成したり，児童のワークシートで活用したりして児童が積極的に思考方法を活用しようとする態度を養う。

また，思考方法を使って獲得した知識を基に根拠をもって判断したり，判断したことを表現（可視化）したりするために思考ツールとして三角ロジックを活用する。三角ロジックとは，主張，事実，理由の三つからなる論理的思考の基礎となる考え方である。学習したことを基に因果関係を明らかにして根拠をもって意思選択したり，選択・判断したことを表現（可視化）したりする。そして，社会に見られる課題の解決に向けて，重要である知識を選択し，それについての自分の考えを明らかにする。そうすることによって社会への関わりについて根拠をもって選択・判断し，表現できると考える。思考ツールの活用では，思考方法に関係の深い思考ツール（**表３**）を参考に，教材の工夫を行う。しかし，思考ツールには様々な種類があるので，活用するためには，まずは授業の中で深める思考活動を具体化し,その思考方法に関係の深い思考ツールを十分検討する必要がある。その際には，児童の発達の段階や実態，単元のねらいを考慮することも大切である。

表３　思考方法と思考ツールの対応

思考方法	思考ツール
くらべる	ベン図，マトリクス，座標軸
わける	ベン図，くま手チャート，マトリクス，データチャート，座標軸
つなぐ	イメージマップ，ステップチャート，コンセプトマップ，同心円チャート
つなぐ（理由付ける）	データチャート，クラゲチャート，バタフライチャート，情報分析チャート
つなぐ（構造化する）	ステップチャート，コンセプトマップ，ピラミッドチャート，フィッシュボーン

⑵　児童自ら問題解決を図る学習過程と問いの工夫

授業では，児童自らが問題解決を図るための，単元を貫く問いが重要である。児童が単元目標に迫っていくための推進力となるからである。教師は，どのような問いを児童にもたせたいのかを十分検討し，単元を組み立てることが大切である。その際には，児童の問題意識に沿った学習過程に

表４　問題解決的な学習過程の中で想定される児童の姿と教師の手立て

学習過程	児童の姿	教師の手立て
事前	「前に○○について学んだ。」 「前に○○についてしたことがある。」	・　児童・地域の実態の把握 ・　実態を踏まえた単元構想 ・　中心概念の設定
つかむ	「だれが○○をしているのだろう。」 「いつ○○はしているのだろう。」 「どこで○○は行われているのだろう。」 「どうして○○をしているのだろうか。」 「学習問題の答えはどうなるのだろうか。」	・　問題意識をもたせる導入の工夫（児童の身近な生活と関わりがあるもの・多様な疑問や発見が想定できるもの・切実感のあるもの） ・　学習問題や追究の柱の設定
調べる	「○○の方法で調べると○○が分かった。」 「○○はどのようにして行われているのだろう。」 「○○はなぜ○○なのだろう。」	・　体験的な活動の設定 ・　追究の柱に基づいためあての設定 ・　交流・対話する活動の場の設定 ・　基礎・基本の定着を図る場の設定
まとめる	「なるほど，そういうことか。」 「○○は，○○だから，○○だったんだ。」	・　学習内容を整理する場の設定 ・　振り返りシートの活用 ・　適切な表現方法（図表・新聞・議論等）の吟味・選択
生かす	「これから○○はどうなるんだろう。」 「○○はどうすべきなんだろう。」 「自分たちにできることはなんだろう。」 「○○のことについてさらに調べたいな。」	・　よりよい社会への関わり方を選択・判断する場の設定 ・　実践化を図る場の設定 ・　実践意欲につなげる工夫

することで，より主体的な問題解決を促すことができると考える。**表４**は想定される児童の姿と教師の手立てについて表したものである。問いによってどのように児童の思考が促され，どのような知識が獲得されていくのかを児童の姿として想定し，組み立てを考え，単元計画を作成する。

⑶　知識をつなぐ振り返りの工夫

ア　１単位時間における振り返りの工夫

学んだ知識をアウトプットさせ，自己の学びを省察させるために毎時間，授業の終末に振り返りを行う。その際には，前述にあった**図５**の振り返りの機能を果たすための視点をいくつか設定することが必要である。**図７**は，振り返りの視点の例である。教師は，これら全ての視点を網羅するのではなく，社会科の特質や学習のねらいを踏まえた上で，それぞれの学習や活動の内容に見合った視点を設定したり，軽重をつけたりすることで振り返りの指導を構想する必要がある。学習活動をどのように終えるかによって，次の学習活動への意欲は大きく変わる。そのためにも，振り返りを行うことで児童が充実感や達成感，自己有能感などを感じたり，学び合いを通した一体感などを感じたりすることができるようにする工夫も必要である。

振り返りの視点

①　本時のめあてに対して，できるようになったこと

②　学習活動を通して，明らかになったこと

③　工夫して考え，取り組んでみたこと

④　仲間の考え・表現のよさ

⑤　学びの中でさらに考えたり表現したりしてみたいと感じたこと

図７　授業における振り返りの視点の例
『主体的・対話的で深い学びを実現する振り返り指導の基礎知識』梶浦真著 *4) 2020

イ　単元終末におけるまとめの工夫

社会的事象について調べた事実や考えたことを構造化させ，概念的知識を獲得させるためには，単元末のまとめで，調べてきたことや考察したことを振り返り，吟味や修正を加え，学習問題の解決を図ることが大切であると考える。そこで図表などを使って調べた知識を整理することで学習内容を構造化させる工夫を行う。そのための手立てとして，振り返りシートの工夫を行う。

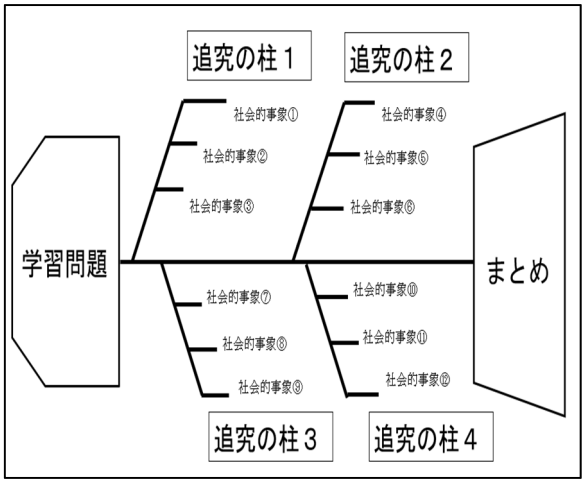


図８　フィッシュボーン図の例

概念的知識を獲得させるために，これまで調べた知識や事実を整理し，学習内容を構造化させる。手立てとしては，思考ツールの一つであるフィッシュボーン図を参考に，まとめシートの工夫を図る。フィッシュボーンとは，**図８**にあるように，頭にテーマや問題，小骨には追究の柱に沿った社会的事象を記入し，問題の原因を洗い出したり，具体的事実を根拠としてまとめ，構造化したりする際に用いるツールである。これを改良し，尻尾をつけることで，知識の構造化と学習問題の解決を一枚の紙面でできるようにする。

３　児童の実態

⑴　実態調査の概要

ア　目的　　研究主題についての基本的な考え方を踏まえて，本校児童の実態を，社会科学習に対する興味・関心や問題解決的な学習や社会科におけるまとめる学習活動に関する取組状況について把握し，分析するため。

イ　対象　　垂水市立垂水小学校第４学年児童49人

ウ　実施月　　令和２年５月

エ　方法　　質問紙法

*4)　梶浦真著　監修小林和雄　『＜主体的・対話的深い学びを実現する＞【振り返り指導】の基礎知識―質の高い授業づくりを支える理論と実践―』2020 教育報道出版社

オ　内容　　社会科学習全般について

⑵　実態調査の分析と考察

「社会科で学習したことは，自分の生活と関係がある」と答えた児童の割合は，「あてはまる」，「ややあてはまる」を合わせて94%であった（**図９**）。このことから，社会科学習での学びが生活とつながっているという実感をもつ児童が多いということが分かる。今後も学習したことを実際の生活に結び付けられるような学びの手立てを工夫することが必要である。

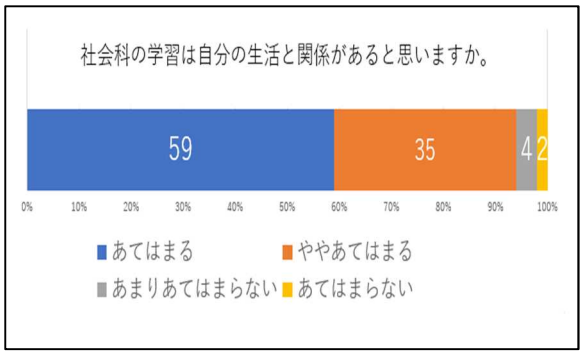


図９　社会科学習と生活との関係についての児童の割合（%）

また「社会科の学習は予想を基に調べる計画を立てている」と思う児童の割合は，「あてはまる」，「ややあてはまる」を合わせると92%であった（**図10**）。しかし，「あてはまる」と答えた児童に着目すると，31%にとどまっている。自分の予想を基に調べる計画を立てるというのは，社会科における問題解決的な学習を指しており，児童が，問題解決の実感や達成感を味わえていないということや，問題解決の学習過程が十分に機能していないということが推測される。さらに，「学習したことを自分でまとめて書くことができる」と思う児童の割合は，「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせると92%であった（**図11**）。

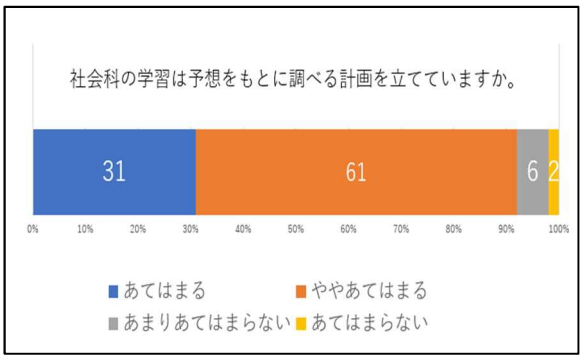


図10　問題解決的な学習について行っていると思う児童の割合（%）

その中でも「あてはまる」と答えた児童は35%にとどまった。学習を通して獲得した知識や技能が十分に表出できていないということから，内容が十分に理解されていないということや，表現するための手立てや場の設定が十分に行われていないということが推測できる。

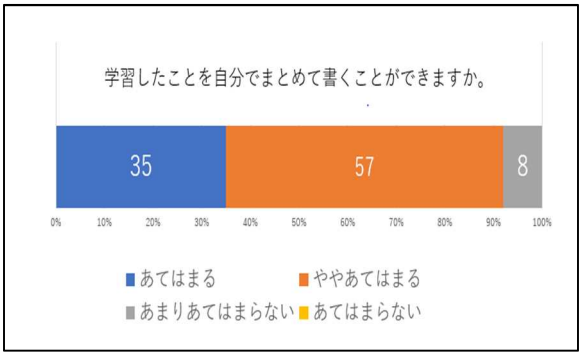


図11　学習したことを自分でまとめられると思う児童の割合（%）

そこで，これらの児童の実態と基本的な考え方や視点を踏まえて，検証授業に向けたねらいと手立てについて以下のとおり設定した。

	研究の視点	ねらい	手立て
視点1	思考方法の活用と思考の可視化	児童が適切に思考方法を活用することができるようになったり，思考を可視化することのよさが分かったりする。	思考方法を活用する場を設けるとともに，思考を可視化する教材（思考ツール）の工夫を行う。
視点2	児童自ら問題解決を図る学習過程と問いの工夫	学習対象と児童をつなげる学習過程を工夫し，児童が主体的に問題解決する力を育成することができるようにする。	児童の問題意識に沿った学習過程にする。また，児童にとって身近な教材を取り入れたり，見学・体験の場を設定したりする。
視点3	知識をつなぐ振り返りの工夫	毎時間の振り返りを通して自分の学びを整理し，自分とのつながりで考えることができるようにする。 単元末のまとめを通して概念的な知識につなげることができるようにする。	毎時間の振り返りでは，二つの視点を基に振り返りを行う。 単元末のまとめでは概念的知識に高めるためのまとめシートの工夫を行う。

４　検証授業Ⅰ（第４学年「ごみのしょりと利用」）の実際と考察

検証授業Ⅰでは，「社会的事象の見方・考え方」を働かせた問題解決的な学習を図るために，児童の声や姿を想定する中で，問いを構想し，単元計画を作成する。また，思考方法を使って調査活動をさせ，学習したことを基に判断・表現させるための表現方法として三角ロジックを活用する。さらに，毎時間終末に授業を通して分かったことや考えたことを振り返らせる。

⑴　検証授業Ⅰの概要＜令和２年６月実施　第４学年49人＞

ア　単元名　「ごみのしょりと利用」

イ　小単元の目標

(ｱ)　知識及び技能

○　地域の生活環境に配慮しながら廃棄物を安全かつ衛生的に処理していることを理解できる。

○　関係機関が相互に連携して処理したり再利用したりしていることを理解できる。

○　地域の人々の日常生活において大量で多様な廃棄物が排出されていることを理解できる。

○　現在に至るまでに衛生的に処理する仕組みがつくられ，計画的に改善されてきたこと，その結果，地域の公衆衛生が向上し，人々の生活環境が維持・向上してきたことなどを基に，廃棄物を処理する事業について理解できる。

○　見学・調査して必要な情報を集めたり，関係相互機関の協力関係などを読み取ったりすることができる。

○ 調べたことを絵や図表などにまとめることができる。

(ｲ)　思考力，判断力，表現力等

○　処理の仕組みや再利用，県内外の人々の協力などに着目して，廃棄物の処理のための事業の様子を捉え，その事業が果たす役割を考え，表現することができる。

○　処理の仕組みや再利用，県内外の人々の協力などに着目して，問いを見いだし，廃棄物の処理のための事業の様子について考え，表現することができる。

○　廃棄物を処理する仕組みや人々の協力関係と地域の良好な生活環境を関連付け，学習したことを基に，ごみを減らすために，自分たちが協力できることを考えたり選択・判断したりして表現することができる。

(ｳ)　学びに向かう力，人間性等

○　廃棄物の処理について，主体的に問題を解決しようとする態度やよりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養う。

○　思考や理解を通して，地域社会に対する誇りと愛情，地域社会の一員としての自覚を養う。

ウ　指導計画（全11時間）

過程	主な学習活動
つかむ	1　家庭のごみ調べを通して分かったことを友達とクイズに出し合うことで，学習問題を立てる。 2　分別されたごみがいつ，誰が，どこにどうやって運んでいるのかを調べる。 3　学習問題の予想を基に学習計画を立てる。
調べる	4　肝属地区清掃工場について調べる。 5　垂水市清掃センターと堆肥センターについて調べる。 6　ごみ問題について調べる。 7　ごみを減らすための取組について調べる。
まとめる	8　調べて分かったことをまとめ，新たな学習問題を立てる。
生かす	9　ごみに関する現状の課題を調べるための計画を立てる。 10　現状の課題から自分たちにできることについて考える。 11　自分たちにできることを実践する。

⑵　単元計画

思「思考力，判断力，表現力等」　問問題解決的な学習　振振り返り

過程	主な学習活動	指導上の留意点	教師の発問と児童の反応　S:児童　T:教師
つかむ	1　ごみ調べで分かったことを友達にクイズで出す活動を通して，大量で多様なごみを出していることに気付き，学習問題を設定する。 ＜学習問題＞　垂水市で出されたごみは，どのように処理されているのだろうか。 2　ごみの種類によって運ぶ場所や曜日，出し方などが違うことをごみカレンダーやごみ袋等から調べる。 3　学習問題の予想をし，学習計画を立てる。 埋めているのかな。 どうやって調べようかな。	問【興味・関心が高まる資料提示・活動】 ・　クイズを出す時に，「どんなごみを」「いつ」「だれが」「どこに」「どうやって」出しているのか視点を与え，全員がクイズを出し，参加できるようにする。 思【身近な生活と関連付けた資料提示】 ・　ごみカレンダーやごみ袋，分別表で調べることを通してごみの種類を理解させる。 ・　ごみによって行き先の違いを，地図で確認させる。 思【単元の学習を方向付ける学習計画】 ・　予想を分類させ，「どうやって」「なんのために」処理をしているかと疑問をもたせ，学習計画を立てさせる。	【興味・関心が高まる資料提示・活動】 T:「ごみ調べからクイズを出してみよう。」 S:「〇〇幼稚園の前に来るごみ収集車の色は何色でしょうか。」 S:「オレンジ色だ！」 S:「前に見た収集車は黄色だったよ。なんで色がちがうのかな？他にもいろんな色の収集車ってたくさんあるのかな？」 S:「垂水市内の収集車のことについて調べてみたいな。」 【単元の学習を方向付ける学習計画】 T:「垂水市で出されたごみはどのように処理されていると思う？」(見方：仕組み，働き，事業の役割など) S:「つぶして燃やすんだと思う。」 T:「どこでしてるんだろうね。」(見方：地理的位置) S:「清掃センターでしてると思う。」 T:「どうやってしてるんだろうね。(見方：仕組み) S:「ロボットがしてると思う。」 S:「リサイクルしていると思う。」 T:「なんのためのリサイクル？」(見方：背景) S:「地球が汚れるから。」 T:「どうやって調べていけばいいかな。」
調べる	4～7　追究の柱に沿って調べる。 ①　肝属地区清掃センターについて ②　垂水市清掃センターと堆肥センターについて ③　ごみ問題について ④　ごみを減らす取組について	振【二つの視点による振り返りの場】 ・　「学習で分かったこと」「学習を通して考えたことや自分とのつながりで考えたこと」などを毎時間振り返らせる。	【二つの視点による振り返りの場】 S:「ごみもむだにしないで，堆肥にしたりお金にしたりしているんだね。」 S:「学級園の肥料は，自分たちが出したごみからできているんだ。」
まとめる	8　調べて分かったことを整理することを通して，自分ができることについて考え，判断する。 ごみを少なくしたい。その理由は，お金がかかるし，埋める場所もないから。 ＜新たな学習問題＞　垂水小学校のみんなでごみをへらすには，どうしたらよいだろうか。	思【社会への関わり方を選択・判断する場】 ・　ごみについてこれから自分はどう関わっていけばよいか，前時までに調べて分かったことを根拠に三角ロジックを用い，表現させる。 ・　自分だけでなく多くの人にごみの減量に協力してもらうためにどうすればよいかを考えさせる。	【社会への関わり方を選択・判断する場】 T:「ごみをどうしたい？」(見方：持続可能性) S:「減らしたい。」 S:「分別したい。」 T:「そう考えた理由は？どんなことからそう思ったの？」(見方：つながり) S：「垂水市清掃センターでは人の手を使って分別してたから，分別する人が少しでも楽できるようにしたいから。」 T：「自分一人の力よりもたくさんの人の力が必要そうだね。」
生かす	9　垂水小学校のみんなのごみの現状について調べる計画を立てる。 10　調べて分かったことを報告し，垂水小学校の課題から解決策を考える。 11　自分たちにできることを考え，活動する。 ごみを減らすのに協力してもらうために，みんなに校内放送で学習したことを伝えたい！	振【よりよい社会を考え主体的に問題解決しようとする場】 ・　学んだことを自分たちの生活に生かすために，ごみ調べを通して出てきた問題点や解決策を考えたり，話し合ったりさせる。 思【社会への関わり方を選択・判断する場】 ・　自分たちも社会の一員としてできることはないか考えさせ，選択・判断させる。	【よりよい社会を考え主体的に問題解決しようとする場】 T:「垂水小学校のみんなにごみを減らす協力をもらうためにはどうしたらいい？」(見方：協力) S:「ポスターを描いて貼ればいい。」 S:「ごみ新聞を作って見てもらう。」 S:「分別表を作って貼ればいい。」 S:「食べ残しや食品ロスを減らすために冷蔵庫の中の食材を見える化したい！」 S:「ごみが落ちてない学校にするためにごみ拾いグランプリをしたい！」

⑶　検証授業Ⅰの考察　（思「思考力，判断力，表現力等」　問問題解決的な学習　振振り返り）

過程	成果	課題
つかむ	問　家庭のごみ調べで分かったことを，クイズ形式にして友達と出し合うことで，身近な生活への疑問を喚起し，ごみに対する興味・関心を高めることができた。 問　身近な生活の中にある有料ごみ袋やごみ収集カレンダー，ごみ分別表などを取り上げることで，児童は切実な問題意識をもつことができた。 思　学習問題の予想を比較・分類する活動を通して，学習計画を立て，見通しをもつことができた。	●　身近な生活の中にあるごみ袋やごみ収集カレンダーなどを基に予想を立てる際に，児童から資料の必要性が出てくるような工夫や見通しのもたせ方に更に工夫が必要である。 ●　学習問題の予想を立てる際に，前時の学習や生活体験を基に根拠をもって予想をさせる工夫や手立てが必要である。 ●　学習問題の予想を比較・分類することはできたが，それらをまとめ，学習計画につなげるためには，教師の発問や教材の工夫が必要である。
調べる	問　毎時間，自分の予想を基に，調べる内容と方法を検討し，調べ学習を行ったことで，見通しをもって学習に取り組めた。 思　「くらべる」，「わける」，「つなぐ」 などの思考方法を使って調べ学習を行うことができた。 振　毎時間の終末に振り返りを行うことで，教師は次時の授業に生かすことができた。	●　見学･体験をすることができなかったために，児童の学びを広げたり深めたりすることが難しかった。見学・体験を行えない代わりに学びを広げる工夫が必要である。 ●　見学を行えない代わりに，教師が見学してきたものを写真や資料等で提示したが，資料を精選する必要があった。 ●　情報を整理するために，児童は思考方法を選択し使い，処理できるようになっているが，概念化したり，構造化したりするための思考方法の活用には，更に工夫が必要である。 ●　振り返りで何を書いたらよいか分からない児童が少なくなかった。書き方については更に指導が必要である。
まとめる	思　三角ロジックを用いて調べて分かった事実を整理し，自分の主張を論理的に表現することができた。 思振　調べて分かったことから，自分ができることや大切にしたいことを判断し，表現することができた。	●　三角ロジックのよさについて理解し，根拠をもって表現できるように工夫する。 ●　論理的に表現するために三角ロジックを取り上げたが，調べて分かった事実同士をつなげ概念化するためのまとめには，別の工夫が必要である。
生かす	問　新たな問いから再度ごみ調べをして現状の課題を洗い出すことで，自分たちにできることについて積極的に考えることができた。 問　校内掲示や校内放送を通して実践化を図ることで，他学年にもごみ減量の意識を広げようとする意識が高まった。 振　一枚ポートフォリオによる振り返りで，単元を通した学びの変容について気付くことができた。	●　学習したことを生かすという目的意識を明確にし，教師主導になったり，実現困難な実践になったりしないようにする。 ●　実践化を図る際に，児童にどうして実践しようと思ったのかの理由や児童の考えを明確にさせる必要があった。 ●　児童自身が成就感や達成感を感じられるような振り返りの視点をもたせる必要がある。

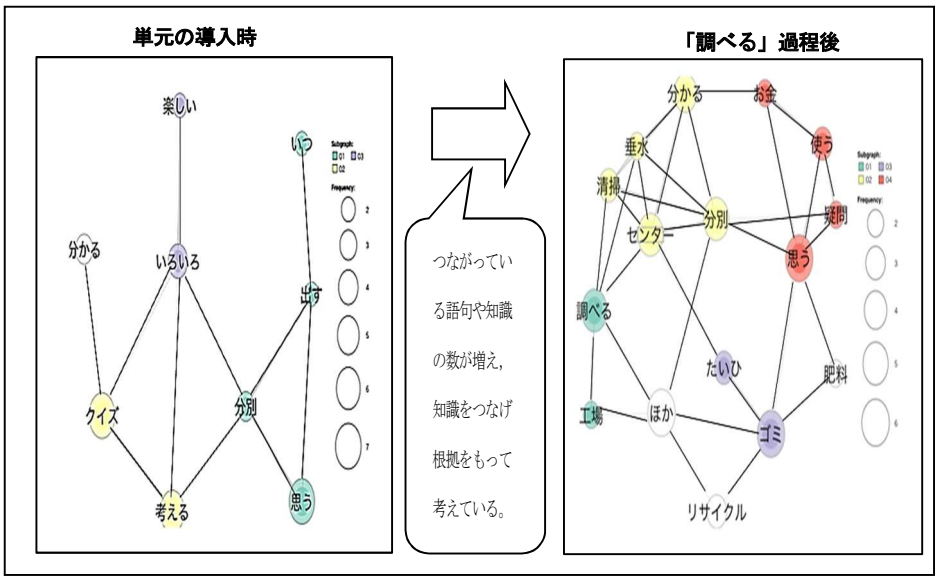


図 12　振り返りカードの分析

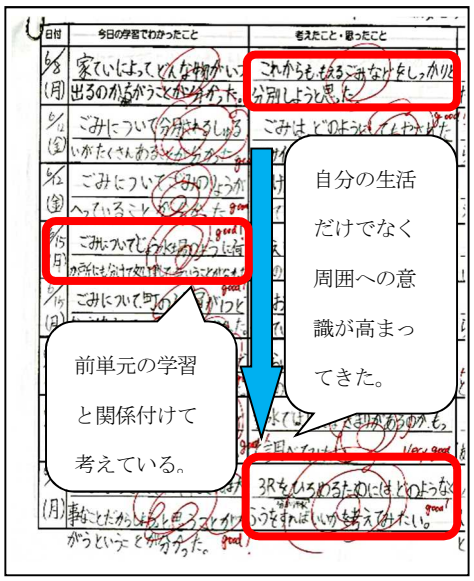


図 13　１枚ポートフォリオによる評価

［児童の思考の高まり］

学習した知識を活用して児童がどのように思考したか記入させ，児童の変化（授業後に考えたこと・思ったこと）を見取るために，計量テキスト分析 KHcoder[*5] による分析と１枚ポートフォリオを活用した。**図 12** では，調べる学習を通してごみについて他地域との関わりや処理の仕方について見方や考え方が広がっていく様子が分かる。また，１枚ポートフォリオから，ごみについて考えた記述をまとめると，ごみについて自分の生活の中だけで考えていたものが，自分たちにできることを考えてみたいと，問い直す姿が見られた。（**図 13**）。

図 14 は，単元末に行った三角ロジックを用いた振り返りの板書である。児童は，調べた事実から必要な情報を選択し，それについての自分の考えを明らかにすることで，根拠をもって，意思選択をすることができた。

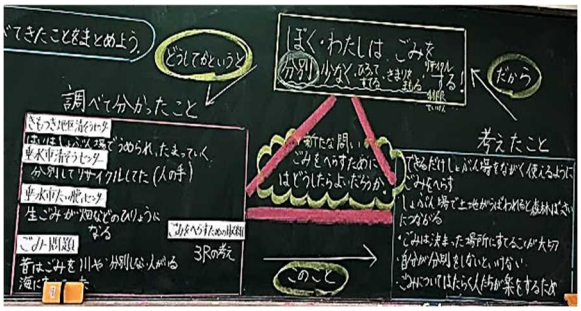


図 14　三角ロジックを用いた単元末の振り返りの板書

(4)　検証授業Ⅱに向けての改善

検証授業Ⅰの反省を踏まえ，検証授業Ⅱでは以下のことを改善して実践につなげた。

研究の視点	検証授業Ⅱに向けての改善点	手立て
思考方法の活用と思考の可視化	思考方法のよさや思考を可視化するよさを児童が実感できるような学習活動や教材の工夫ができるようにする。	社会的事象について調べる際に，思考方法を発揮できる場を設けることで，児童が思考方法のよさや思考を可視化するよさを自覚できるようにする。 改善１
児童自ら問題解決を図る学習過程と問いの工夫	見学・体験を伴う問題解決や，学習対象と児童たちをつなげる学習過程を工夫する。	児童にとって身近な生活と関連付けた見学・体験ができるような問題解決の工夫を行う。 改善２
知識をつなぐ振り返りの工夫	児童が振り返りのよさを自覚し，概念化した知識につなげるために振り返りの視点を工夫する。	学習活動に応じた振り返りの視点を設定し，必要感をもって児童が振り返りをするために，振り返りの見取りや振り返りシートを工夫する。 改善３

[*5] 計量テキスト分析 KHcoder　テキストマイニング手法の１つ。テキストデータ中に共通して出現する単語を抽出し，円で表現し，円の大きさは出現頻度を表す。線で結ばれている円同士は共通に出現していて共起関係があり，距離や位置ではなく，線で結ばれているかが重要である。

５　検証授業Ⅱ（第４学年「のこしたいもの　つたえたいもの」の実際と考察

検証授業Ⅱでは，検証授業Ⅰの課題を踏まえ，思考方法や思考を可視化することのよさを実感するために学習活動や教材の工夫をする。また，問題解決の学習過程では，児童と学習対象をつなぐ見学・体験を行うための工夫・改善を行う。さらに，知識を概念化するための振り返りについて単元末と毎時間ごとに振り返りの工夫を行う。

⑴　検証授業Ⅱの概要＜令和２年 10～11 月実施　第４学年 49 人＞

ア　小単元名　「のこしたいもの　つたえたいもの」

イ　小単元の目標

(ｱ) 知識及び技能

○　文化財や年中行事は，地域の人々が受け継いできたことや，それらには人々の様々な願いが込められていることを理解することができる。

○　見学・調査したり，写真資料や聞き取り調査などで調べたりして，必要な情報を読み取ったり，集めたりすることができる。

(ｲ) 思考力，判断力，表現力等

○　歴史的背景や現在に至る過程などに着目して見学・調査を行うことで，問いを見いだし，文化財や年中行事の保存についての取組の様子について考え，表現することができる。

○　歴史的背景や保存や継承のための取組などに着目して，人々の願いや努力を考え，表現することができる。

○　現在まで継承されてきた理由や文化財や年中行事の意味や意義を歴史的背景等と関連付けることを通して，これからも受け継いでいくために自分たちにできることを考え，選択・判断したり表現したりできる。

(ｳ) 学びに向かう力，人間性等

○　県内の文化財や年中行事について主体的に調べたり，問題解決に取り組んだりすることを通して，学習したことを生かして自分たちにできることを考えたり，社会生活に生かそうとしたりする態度を養う。

○　思考や理解を通して，地域社会に対する誇りと愛情，地域社会の一員としての自覚を養う。

ウ　指導計画（全10時間）

過程	主な学習活動
つかむ	1　歴史的背景や土地の様子に着目し，お長屋について新たな発見や疑問を見いだす。 2　お長屋についての発見や疑問から学習問題と学習計画を立てる。 3　お長屋の歴史について調べる。 4　お長屋の歴史についてゲストティーチャーにインタビューすることを通して聞き取り，調べる。 5　妙円寺詣りについて資料から問いを見いだし，学習問題と学習計画を立てる。
調べる	6　妙円寺詣りの取組の様子について調べる。 7　妙円寺詣りの由来について調べる。 8　妙円寺詣りが継承されている理由について調べる。
まとめる	9　妙円寺詣りについて調べて分かったことをまとめる。
生かす	10　自分たちにできることについて考え，表現する。

⑵　単元計画

思「思考力，判断力，表現力等」問　問題解決的な学習　振　振り返り

過程	主な学習活動	指導上の留意点
つかむ	1　総合的な学習の時間に学習したことを思い出して問いを見付ける。 どうしてここに建てたのかな。 なんのために建てたのかな。 2　お長屋について学習問題を作り，学習計画を立てる。 お長屋はお城だから，武士たちが守ってきたのかな。 垂水に住んでる人たちが守ってきたのかな。 **学習問題①　お長屋とはどのような文化財なのだろうか。** 3　お長屋について調べる。 垂水は，なんで日本遺産に選ばれてるんだろう。 島津のお殿様は，どんな人だったんだろう。 4　お長屋についてゲストティーチャーに聞く。 島津忠将は，妙円寺詣りを始めた義弘さんのおじなんだ。 昔から今に受け継がれているものは鹿児島県には他にもあるのかな。 5　妙円寺詣りについて学習問題を作り，学習計画を立てる。 妙円寺詣りってどこでやってるのかな。 妙円寺詣りってどんなことするのかな。 **学習問題②　妙円寺詣りとはどのような年中行事なのだろうか。**	問　「社会的事象の見方・考え方」を働かせた問いを見付けさせるために，見学の前に見学の視点を確認する。 思　学習問題を立てるために前時の問いを「いつ」，「どこで」，「だれが」，「なんのために」の問いに分類させる。 問　お長屋の歴史を理解させるために，お長屋についての年表や資料を提示し，お長屋の由来を調べさせる。 問　お長屋の今までの経緯や城を築いた島津忠将について理解させるために，ゲストティーチャーに積極的に関わらせる。 振　インタビューを通して分かった事実と思ったことや考えたことの視点で振り返りをさせる。 問　県内の文化財や年中行事に考えを広げるために，妙円寺詣りを取り上げる。 思　疑問や予想から学習問題を立て，調べる方法の見通しをもたせるために妙円寺詣りの写真を提示する。
調べる	6　妙円寺詣りはどのように行われているか調べる。 いつから，だれがはじめたんだろう。 子供たちは何のためにたくさん歩くんだろう。 7　妙円寺詣りの由来について調べる。 妙円寺はなくなったのに，今も続いているんだな。 どうしてそんなに長く続いているのだろう。 8　妙円寺詣りが今も続いている理由について調べる。 私たちへの思いも含まれているんだね。大切にしなきゃね。 町を盛り上げるためだけじゃないんだね。	問　妙円寺詣りの取組の様子について迫るために，取組の様子の写真資料や新聞資料を基に協力関係について話し合わせる。 問　妙円寺詣りの由来について理解させるために動画と写真を提示し，調べさせる。 思　行事を続けてきた人々の思いを理解させるために，妙円寺歴史年表と参加者のインタビュー動画を提示する。
まとめる	9　妙円寺詣りについて調べて分かったことをまとめる。 妙円寺詣りは，島津義弘が戦いから無事に生きて帰ってこれたことを称えて武士の間で始まり，今も地域の人たちに大切に受け継がれている行事なんだ。	思振　学習問題の答えを出すために，前時までに調べたことをフィッシュボーン図を基にした図にまとめさせ，グループで話し合わせる。
生かす	10　地域に残る古いものを守り，受け継ぐために，自分たちにできることは何か考える。 地域の行事に参加してみたくなったな。 知らない人に教えて，どんどん伝えていくといいと思う。	振　自分たちに出来ることに気付くために，島津のお殿様になったつもりのなりきり手紙を書かせる。

⑶　検証授業Ⅱの実際と考察

ア　児童主体の問題解決的な学習における学習問題づくり（第１・２時）の場面の実際

過程	主な学習活動	主な教師の発問・指示と児童の反応（T：教師，S：児童）
つかむ	1　３年時の総合的な学習を想起し，お長屋についての関心を高め，本時のめあてを立てる。 2　見通しをもって取り組めるように学習の流れを考える。 3　問題意識をもって見学をするために見学の視点を考える。	T：「３年生の総合的な学習の時間でどんなことを学習した？」 S：「昔，垂水小学校にはお城があったんだよ。」 T：「垂水小にお城があったという歴史を今に伝えているものが学校の中にあるよね？」 S：「お長屋だ！」 T：「お長屋についてどんなことを知ってる？」 S：「昔の道具がしまってある以外は知らない。」 S：「お長屋についてもっと調べてみたいな。」 本時のめあて お長屋を見学して，三つの発見や疑問をさがそう。そして，学習問題と学習計画を立てよう。
調べる	4　お長屋を見学する。 5　調べて分かった発見と疑問を付箋に書く。 6　見学を通して見付けた発見や疑問を話し合う。	S：「日本遺産に登録って書いてある！どんな意味かな？」 S：「⊕がついてる！何だろう？薩摩のマークかな？」 S：「400年前に建てられたって石碑に書いてあるよ！」 S：「お長屋は木と石垣でできているんだね！」 S：「林之城跡って書いてある！どんな意味だろう？」 S：「垂水島津家って書いてある！島津のお殿様かな？」 （付箋に書いたことをグループで伝え合い，共有する。） T：「どんな発見や疑問があったかな？」 S：「機械もない時代にどうやって作ったのかな？」 S：「⊕がついてた！薩摩や島津と関係があるのかな？」 S：「誰が作ったのかな？何のために作ったのかな？」 写真１　見学の様子
まとめる	7　出てきた発見や疑問を内容ごとに分類する。 8　学習問題を立てる。 9　学習計画と調べる方法について考える。 10　本時の学習活動について振り返る。	T：「これらのことを調べるためには，どんな学習問題を立てればいい？」 単元の学習問題 お長屋はどのような文化財なのだろうか。 T：「どうやって調べればいいかな？」 S：「インタビューしてくわしい人に聞いたらいいんじゃないかな。」 T：「最後に，今日の見学で分かったことやできたことと，見学を通して自分で考えたことを振り返ってみよう。」 写真２　話合いの様子

イ　児童主体の問題解決的な学習における学習問題づくり（第１・２時）の場面の考察

見学・体験を通して問題意識をもたせる活動　改善２　問題解決の工夫

総合的な学習の時間を想起させるとともに，学校の中にある身近な文化財を取り上げることで，本単元への児童の意欲は高まっていった。見学の前に，お長屋についての発見や疑問を見付けることができるように，お長屋周辺にある石碑や看板，土地や建物の様子などを意識させて見学を行った。見学の中での発見や疑問をそれぞれ付箋を使って整理することで，問題意識をもって最後まで見学を行うことができた。児童からは，「なぜ今も残されているのだろう？」「400年前に建てられたのはすごい！」「どうやって重い石をたくさん運べたのだろう？」等の疑問や発見が多く出された。

身近な教材を取り上げて見学・体験をすることで問題意識をもつことができた。

写真３　視点に沿った見学の様子

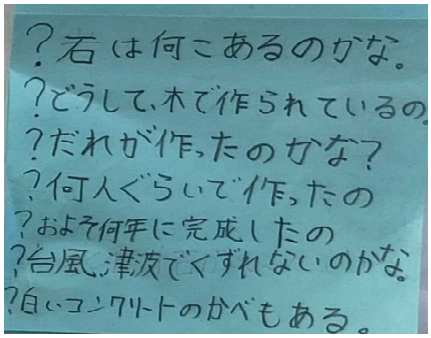


写真４　疑問を書いた付箋

見学を通した発見や疑問を共有し，学習問題を立てる。　改善１　思考方法の活用

見学を通して探した発見や疑問をそれぞれ付箋に書き，それらをグループで共有し，比較したり内容ごとに分類したりすることを通して，解決したいことを考えたり，重要だと思うものを選んだりしながら，グループ全体として意見をまとめた。グループでまとめたものを出し合い，さらに全体で比較したり内容ごとに分類したり，つなげたりすることで，全体の学習問題を立てた。また，学習問題を解決するために調べる方法と学習計画を考え，見通しをもつことができた。児童は，学習問題のほかに一人一人追究したい疑問や課題をもち，その後の調査活動に取り組むことができた。

児童と教師と協働で学習問題を立てることでより自分事として学習問題を捉えることができた。

写真５　グループ活動の様子

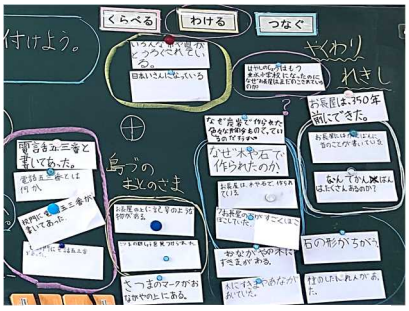


写真６　板書の様子

ウ　児童主体の問題解決的な学習における調査活動（第４時）の場面の実際

過程	主な学習活動	主な教師の発問・指示と児童の反応（T：教師，S：児童，G:ゲストティーチャー）
つかむ	1　インタビューを通した調査活動における本時のめあてを立てる。 2　見通しをもって取り組めるように学習の流れを考える。 3　インタビューの仕方について考える。	T：「お長屋の昔と今の写真です。どこが違う？」 S：「⊕のマークが付け足されてる。今の方がきれい。」 T：「どうして変わったり綺麗になったりしているの？」 S：「誰かが掃除したりきれいにしたりしている。」 T：「誰がどんなことをして今も残されているのかな？」 S：「校長先生が守っているんじゃないかな。」 T：「今日は，垂水で長い間お長屋を見続けている人に来てもらっているので，聞いて調べてみよう。」 本時のめあて お長屋にはどんなひみつがかくされているのだろうか。
調べる	4　ゲストティーチャーに質問をしたり，話を聞いたりする。	T：「ゲストティーチャーの先生に質問をしてみよう。」 S：「お長屋は機械もない時代にどうやって作ったんですか？」 G:「人や牛を使って作られたそうです。完成するまでに約10年かかったみたいです。」 **写真７　ゲストティーチャーとの学習の様子** S：「島津のお殿様ってどんな人だったんですか？」 G：「２代目のお殿様の絵です。お長屋を作った４代目久信は，垂水でお殿様を終えた後は，鹿屋で過ごすことが多かったそうです。垂水では，『さがんさあ詣り』といって，久信を称えて鹿屋まで歩く遠行が長らく続けられていたそうです。慕われていたんでしょうね。」 S：「お長屋にお殿様が住んでいたんですか？」 G：「お長屋は昔家来の人たちが見張りに使ったり，寝泊まりするときに使っていたそうです。」
まとめる	5　調べて分かったことをまとめる。 6　本時の学習活動について振り返る。	T：「ゲストティーチャーの話を聞いて分かったことを自分の言葉でまとめましょう。」 S：「お長屋は，昔は家来の武士たちが使っていた。垂水小学校が出来てからは，教室として使われていた時もあったみたいだよ。」 S：「保存会の人のおかげで今まで大切に守られたり日本遺産になったりしたんだ。」 T：「ゲストティーチャーの話を聞いて考えたことや思ったことを振り返りましょう。」

エ　児童主体の問題解決的な学習における調査活動（第４時）の場面の考察

インタビューを通した調査活動　改善２　問題解決の工夫

前時に副読本や資料を使ってお長屋が建てられた理由について調べ，まとめることができた。そこで，お長屋を作った垂水島津家のお殿様がどんな人だったかやどのようにして今日まで守られてきたかを調べたり，児童一人一人の追究したい疑問や課題を調べたりするために，垂水歴史保存会の方をゲストティーチャーとして招き，インタビューを通した調査活動を行った。児童らは，見学の際に出た疑問や前時の学習から深まった疑問について自由に質問をしたり話を聞いたりした。まとめは，めあてに沿って，それぞれで分かったことを自分の言葉で振り返りシートにまとめた。

写真８　インタビュー活動の様子

調査活動では，専門家や地域の人材を活用しインタビューをすることで児童の学びを広げることができた。

児童は，インタビューを通して歴史のおもしろさや文化財が今でも大切に守られていることに気付くことができた。

授業終末における振り返りの視点の工夫　改善３　振り返り

振り返りは，二つの視点で行った。一点目は，めあてのまとめとして，学習活動を通して明らかになったことを振り返る視点である。児童は，みんなで立てた学習問題の解決を図るために分かったことを振り返ったり，一人一人でもつことができた追究課題の解決を図るために分かったことを振り返ったりしていた。二点目は，ゲストティーチャーの話を聞いて更に考えたことや思ったことを振り返る視点である。児童は，ゲストティーチャーが語る歴史の豆知識や歴史上の人物の人柄等を想起させるエピソード等から，歴史学習の楽しさや郷土への思いを振り返ったりしていた。

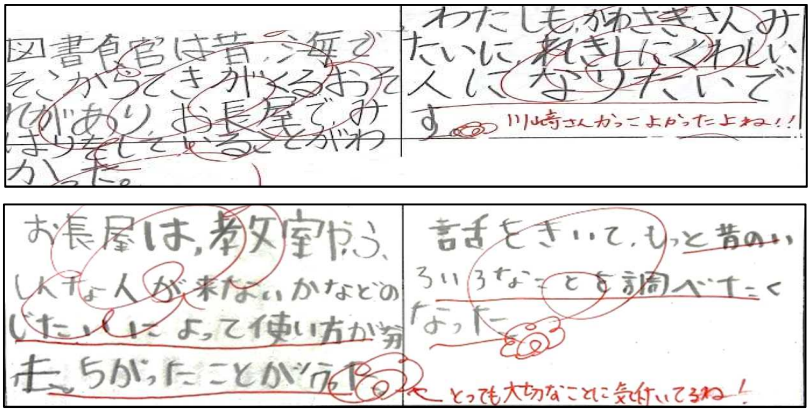
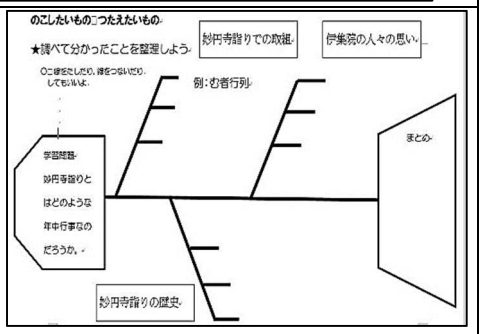


図 15　児童の振り返りの様子

振り返りでは，ゲストティーチャーの印象深い歴史エピソードや郷土への思いに心を動かされた記述が多く見られた。歴史学習の面白さや郷土への興味関心をもつことができた。

オ　学習したことを生かして思考・表現する場面（第９時）の実際

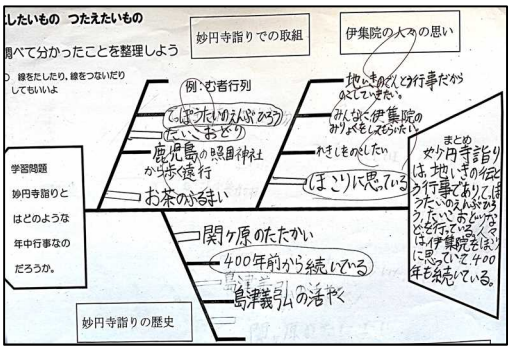
過程	主な学習活動	主な教師の発問・指示と児童の反応（T：教師，S：児童）
つかむ	1　これまでの調査活動を通して，わかったことをまとめ，学習問題の解決を図るための本時のめあてを立てる。	T:「妙円寺詣りについてこれまで調べてきましたね。では，学習問題は解決できたと言えるかな？」 S:「まだ解決できていません。」 T:「じゃあ，調べたことを整理しながら復習して学習問題の答えをみんなで考えていこうか。」 S：「できるか自信ないな。」 T：「では，今日のめあてはどうすればいいかな？」 本時のめあて 妙円寺詣りについて調べて分かったことをまとめよう。
調べる	2　思考ツールを使ったまとめ方について考える。 3　調べて分かったことをまとめる。 4　グループで小単元のまとめについて話し合う。	T：「この図は魚の骨のように見えることから，フィッシュボーン図といいます。」 T：「調べて分かったことをまとめられたら，今度は，それらをつなげてまとめを考えよう。」  **図 16　フィッシュボーン図** （グループでよりよいまとめについて話し合う。） S:「これだと，取組や人々の思いだけのまとめになるから，歴史についてもまとめないといけないね。」 S：「調べた三つのことがまとめにつながっているけど，子供たちの心と体を鍛えるためって大事な気がするからこの部分もまとめに入れるのはどう？」
まとめる	5　グループで話し合ってできたまとめを再度全体で練り合う。 6　小単元の学習問題のまとめをする。 7　本時の学習活動について振り返る。	T:「調べたことをしっかり繋げてまとめを考えることができたね。では，みんなの力を合わせた４年２組のまとめを作っていこう。」 学習問題のまとめ 妙円寺詣りとは，島津義弘の活躍を称え，後世に受け継ぐために始まった年中行事である。今では鹿児島の人々にとって大切な伝統行事である。 T：「今日の振り返りをしましょう。」 S:「まとめを自分で出来るか心配だったけど，自分でまとめることができて楽しかった。」 S:「みんなで協力したのでまとめができた。解決できてスッキリした。よかった。」

カ　学習したことを生かして思考・表現する場面（第９時）の考察

単元における振り返り　　改善３　振り返り

これまで調べて分かったことを整理し，学習問題の解決を図るために，学習前の児童の予想を取り上げ，本時への問題意識をもつことができた。調べて分かった社会的事象の意味や理由をつなげて小単元のまとめを考えることができるように，振り返りシート（**図17**）を活用してまとめをした。「取組」，「人々の思い」，「歴史」の三つの側面から妙円寺詣りについてまとめを考えることで，調べたことを整理し，事象や理由をつなげることでより構造的に理解することができた。

振り返りシートを活用して，学習問題の解決を図るだけでなく，社会的事象の事実同士を結ぶことで因果関係を確認することができた。



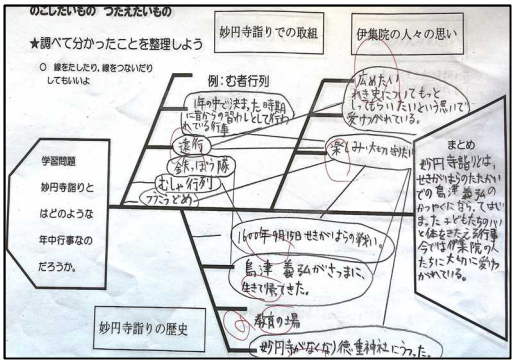


図 17　児童の振り返りシート

よりよいまとめにするための工夫　　改善１　思考方法の活用　改善３　振り返り

児童の実態から，自分でまとめることについて自信がない児童が多かったので，振り返りシートの書き方について考え，まとめを行った。その後は，児童の必要感や実態に応じて，個人やペアで調べたことを整理した後に，それぞれで整理したことを持ち寄り，グループでまとめを考える学習をした。最後は，グループで話し合って作ったまとめを再度練り合い，学級全体でまとめを作ることができた。

この活動により，児童は，より重要なものを選んだり，言葉を精選したりして，よりよいまとめにしようとする姿が見られた。

全員で問題解決を図るために，必要だと感じた時に，必要だと考える相手と対話をさせ，まとめを行った。

写真９　ペア学習の様子

写真 10　板書の様子

キ　学習したことを生かして判断・表現する場面（第 10 時）の実際

過程	主な学習活動	主な教師の発問・指示と児童の反応（T：教師，S：児童）
つかむ	1　学習したことをもとに「なりきり手紙」を通して表現するため本時のめあてを立てる。 2　手紙を書く目的意識と相手意識を明確にする。	T：「単元の最後の時間になりました。みんなはお長屋や妙円寺詣りについて詳しくなりましたか？」 S：「すごく詳しくなりました。みんなにも教えてあげたい。」 T：「では，今日は，お長屋や妙円寺詣りについて伝えるためのなりきり手紙を書いてみよう。」 S：「やってみたい。」 T：「もし久信や義弘が今も生きていたら何て言ってると思う？久信や義弘になりきって手紙を書くんだよ。」 本時の学習問題 学習したことを生かして久信や義弘になったつもりのなりきり手紙を書こう。
調べる	3　書き方について理解する。 4　これまでの学習を生かして手紙を書く。	T：「知らせたい相手を決めて学習したことを生かして手紙を書きましょう。」 S：「他の先生はお長屋について知っているかな？」 S：「お長屋についてたくさん知ってほしいな。」 T：「どうしてそう思ったの？」 S：「お長屋を大切にしてこれからも残したいから。」 S：「お父さんに妙円寺詣りに連れて行ってと書こう。」 T：「どうしてそう思ったの？」 S：「わたしも参加してみたくなったから。」
まとめる	5　なりきり手紙を友達同士で交流する。 6　本時の学習活動について振り返る。	S：「何をした人物か一言で上手にまとめているのがいいね。」 S：「学習したことを入れて書いているところがいいね。」 S：「ゲストティーチャーから教えてもらったことが書けているのがいいね。」 **写真 11　交流活動の様子** S：「妙円寺詣りについての歴史が入っているのがいいね。」 T：「では，単元を通して思ったことやできるようになったことを振り返りましょう。」 S：「なりきって書くと久信の気持ちが少し分かった気がした。」 S：「楽しく学習できた。お家で復習したい。」 S：「久信や義弘に会ってみたいな。」

ク　学習したことを生かして判断・表現する場面（第10時）の考察

「なりきり手紙」を通してこれまでの学習を生かし表現する活動　改善３　振り返り

これまでの調査活動やまとめの活動を通して，児童が学習したことを「伝えたい」，「教えたい」という気持ちを高めることができた。そこで，これまで長い間文化財や年中行事を守り受け継いできた人々への感謝や，これからの自分たちにできることについて考えるために，学習してきた文化財や年中行事のきっかけとなった人物になりきり，学習したことを知らせたい相手に手紙を書く活動をした。

学習したことを生かして人物について一言で紹介したり，これからも文化財や年中行事を継承していくために自分たちにできることについて考えたりすることができた。

手紙を読み合う交流活動では，自分の作品や学習内容を照らし合わせて，よいところを伝え合うことができた。

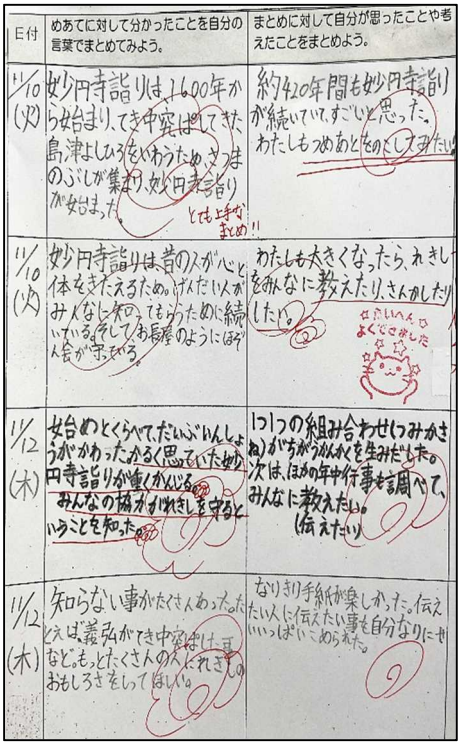
写真 12　交流活動の様子

写真 13　なりきり手紙の発表の様子

学習活動に応じた振り返りの視点の工夫　改善３　振り返り

振り返りの質と量を確保するために，学習活動に応じて振り返りの視点を変えたり，組み合わせたりしながら振り返りを行った。単元におけるつかむ段階では，これから調べてみたいことや疑問を中心に書かせたり，調べる段階では，調べて分かったことを自分の言葉でまとめたり，まとめを受けて自分の考えを書いたりした。まとめる場面では，学習後の変容やできるようになったこと，単元を通して深まった自分の思いなどを表現することができた。児童は，振り返りを行うことで，学習したことを整理したり，自身の変容について実感したりすることができた（**図18**）。

振り返りでは，教師が称賛したり指導したりすることで，振り返りの視点を児童に意識付けるようにした。



日付	めあてに対して分かったことを自分の言葉でまとめてみよう。	まとめに対して自分が思ったことや考えたことをまとめよう。
11/10（火）	妙円寺詣りは1600年から始まり、てき中率はとてもたかい。島津よしひろをいわうためさつまのぶしが集まり、妙円寺詣りが始まった。 とても上手なまとめ!!	約420年間も妙円寺詣りが続いていて、すごいと思った。わたしもつめあとをのこしてみたい。
11/10（火）	妙円寺詣りは昔のスが心と体をきたえるため。げんだいしゃがみんなに知ってもらうために続いている。そしてあ長屋のようにほぞん会が守っている。	わたしも大きくなったら、れきしをみんなに教えたり、さんかしたりしたい。 なるほどいいんだよ よくじてきました
11/12（木）	女台めとくらべてだいぶいんしょうがかわったかるく思っていたが、円寺詣りが重くかんじる。みんなの協力がれきしを守るということを知った。	1つ1つの組み合わせ（つみかさね）がちがうみかくを生みだした。次は、ほかの年中行事をしらべて、みんなに教えたい。（伝えたい）
11/12（木）	知らない事がたくさんあった。たとえば義弘がてき中率はしょ、などもっとたくさんの人にれきしのおもしろさをしってほしい。	なりきり手紙が楽しかった。伝えたい人に伝えたい事を自分なりにいっぱいこめられた。

図 18　児童の振り返りシート

Ⅳ　研究のまとめ

1　研究の成果

⑴　社会科における「思考力，判断力，表現力等」の育成について

思考方法を具体化し，カードやワークシート等にして活用することで，児童が積極的に思考方法を使って調査活動ができるようにした。また，教師は，その都度，思考方法のよさを価値付けることで，**図19**のような表現をする児童が見られるようになった。また，単元終末時に学習した内容を児童が根拠をもって判断・表現できるように，三角ロジックに表現させ，振り返りを行った(**図20**)。児童は，調べた情報から必要な情報を選び出し，それについて自分の考えを明らかにすることで，社会への関わり方について筋道を立てながら考えることができた。

⑵　社会的事象の見方・考え方を働かせた問題解決的な学習について

児童の声や姿を想定する中で，問いを検討し，単元計画を作成した。その際には，児童にとって身近な生活と関連付けた学習教材を取り上げたり，見学・体験を通した調査活動を設定したりすることで問題解決の意欲を高める学習活動を工夫した。これらの工夫により，児童は**図21**に見られるように社会的事象についての問いを多く見付けられるようになった。

また，調査活動の前に予想したり見通しをもったりする場を設定することで，必要感をもって最後まで問題解決を図ろうとする姿が見られた。さらに，実態調査の結果からも，問題解決的な学習について自覚的に取り組めている児童が検証授業Ⅰの時よりも20ポイント増えたのがわかる(**図22**)。このことは，児童の身近な生活と関連付けた学習教材や見学・体験を通した調査活動が，児童の問題解決力を育むのに有効であることを示していると考えられる。

⑶　知識をつなぐ振り返りについて

単元における振り返りでは，学んだ知識をつなげ，構造化した概念的理解を獲得させるために振り返りシートを工夫･改善し活用した。調べた事実を洗い出し，それらをつなぐことで，断片的な知識がつながり，社会的事象の背景や理由を理解し，意味や意義などについて迫ろうとする態度が見られた（**図23**）。

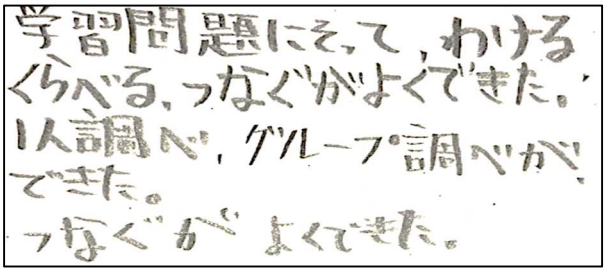


図 19 調査活動での児童の振り返り

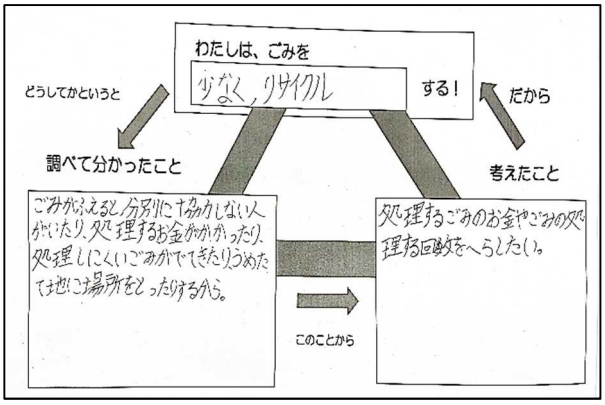


図 20 三角ロジックを用いた児童の振り返り

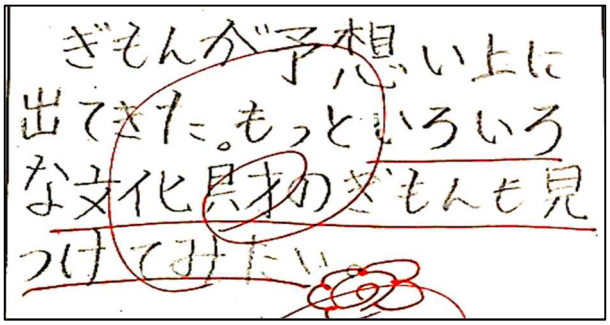


図 21　見学の際の児童の振り返り

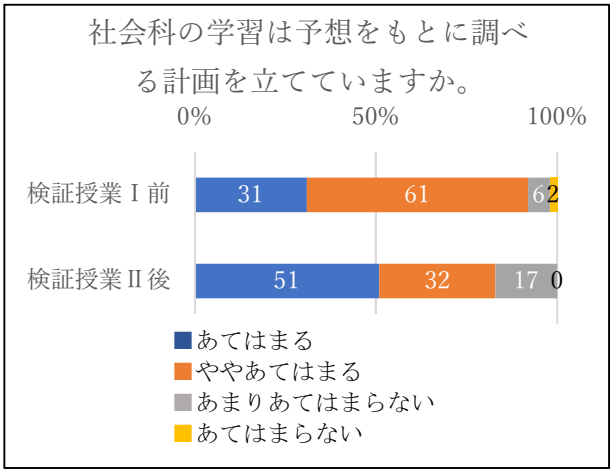


図22　問題解決的な学習について行っていると思う児童の割合（%）

また，児童は，自分たちだけでまとめを作ることができたことに，自信をもち，次時への学習の意欲につながる様子が見られた。このことから，概念的知識を獲得したり，思考を深めたりするためには，振り返りの場での知識の構造化を図る工夫が有効であると言える。

授業終末における振り返りでは毎時間二つの視点で振り返ったことを一枚ポートフォリオに記録した。**図24**は，学習したことを活かしてなりきり手紙を書いた学習活動時の児童の振り返りの記述を計量テキスト分析 KHcoder によって分析したものである。児童は，検証授業Ⅰの時よりも線や単語の数も増えていることから，学んだ知識を表現したりつないだりしていることが分かる。このことから，視点に応じた振り返りを行うことで児童は知識をつなげ，学んだことを表現することができたと考えられる。

また，**図25**の実態調査からは，「学習したことを自分でまとめて書くことができる」という項目に「あてはまる」と答えた児童は，検証授業Ⅰの時よりも18ポイント増えた。

これは，知識をつなげる振り返りの工夫をすることで，学んだことをまとめる活動において自信をもって取り組むことができるようになったということが要因であると考えられる。

2　研究の課題

⑴　児童の「思考力，判断力，表現力等」の育成については，思考ツールの活用等思考の可視化をするための手立ての工夫が必要である。また，発達の段階に応じた思考方法を具体化し，系統的・段階的な指導について更に検討が必要である。

⑵　児童が主体的に自己の学びを調節しながら解決を図っていく問題解決的な学習を具体化するためには，学習過程や問いのもたせ方について研究する必要がある。

⑶　知識をつなぐ振り返りについては，児童が必要感をもつ段階まで高めることができなかったので，今後そのための手立てについて研究していく。また，評価についても更に工夫する必要がある。

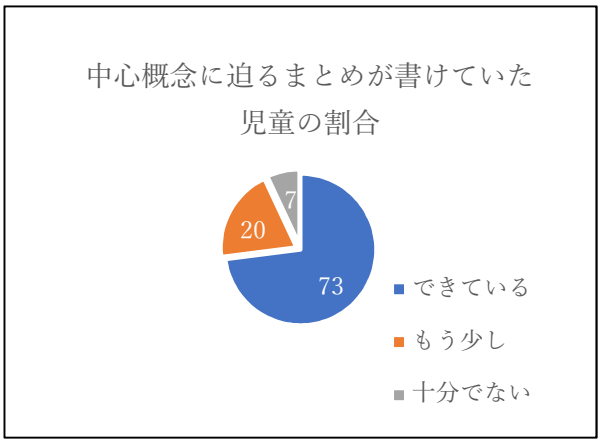


図 23　中心概念に迫るまとめを書くことができた児童の割合（%）

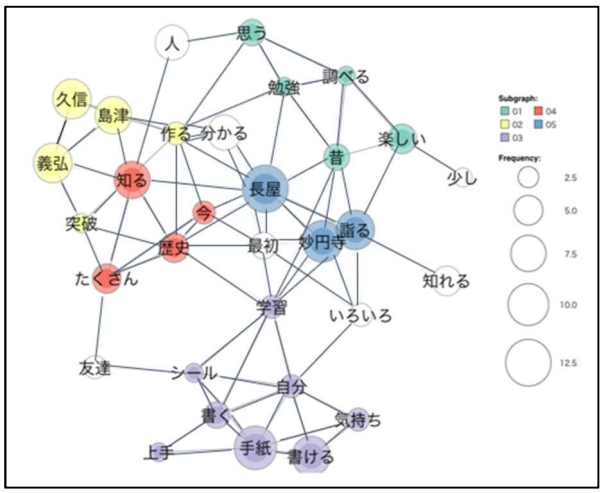


図 24　単元終末に振り返った児童の振り返りカードの分析

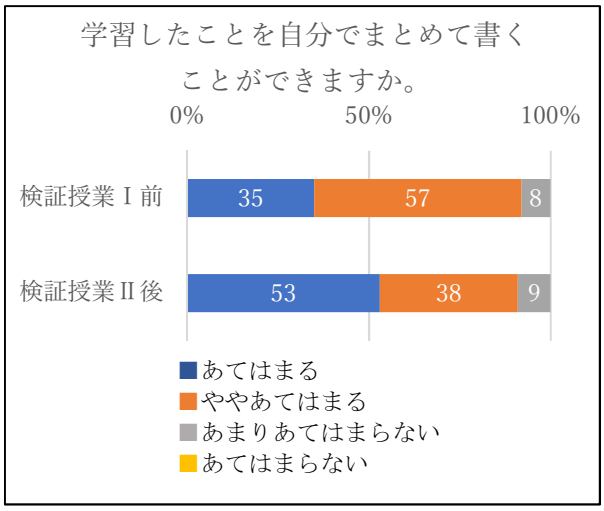


図 25　学習したことを自分でまとめられると思う児童の割合（%）

〈　引用文献　〉

*1）文部科学省　『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説　社会編』2018年　日本文教出版社

*2）田村　学　著　『深い学び』　2018年　東洋館出版社

*3）北俊夫　著　『“知識の構造図”を生かす問題解決的な学習の授業づくり』　2015年　明治図書出版

*4）梶浦真　著　監修小林和雄　『＜主体的・対話的で深い学びを実現する＞【振り返り指導】の基礎知識　―質の高い授業づくりを支える理論と実践―』　2020年　教育報道出版社

〈　参考文献　〉

○　栃木県総合教育センター　『思考力・判断力・表現力を育む授業づくり』　2015年

○　社会認識教育学会　『社会科教育学ハンドブック』　1994年　明治図書出版

○　岩田一彦　著　『社会科固有の授業理論･30の提言―総合学習との関係を明確にする視点―』　2001年　明治図書出版

○　柳沼孝一　著　『社会の授業がもっとうまくなる50の技』　2020年　明治図書出版

○　澤井陽介　著　『小学校　新学習指導要領　社会の授業づくり』　2018年　明治図書出版

○　水落芳明・阿部隆幸　著　『新学習指導要領対応　これで,社会科の「学び合い」は成功する！』　2018年　学事出版

○　澤井陽介・中田正弘　著　『ステップ解説　社会科授業のつくり方』　2014年　東洋館出版社

○　谷川彰英　著　『問題解決学習の理論と方法』　1993年　明治図書出版

長期研修者　［盛岡　佑子］
担 当 所 員　［才川　文秋］

〈研究の概要〉

本研究は，問題解決的な学習における「思考力，判断力，表現力等」を育む社会科学習の在り方について研究したものである。

まず，社会科における思考力，判断力，表現力等とはどのような力なのかを明らかにし，それらの力を発揮できるような問題解決的な学習過程について具体化した。次に，その中で児童が概念的知識を獲得できるような振り返りの場面の工夫を行った。

手立てとして，児童の反応を想定し，「社会的事象の見方・考え方を働かせた問題解決的な学習における指導計画」を作成し，それを基に思考方法を使った調査活動を行った。また，知識をつなぎ，概念的知識を獲得させるために単元終末と一単位時間の終末にまとめの学習を設定し，指導に当たった。

その結果，児童は，思考方法のよさを自覚し，学んだ知識をつなげて理解しようとしたり，表現しようとしたりする姿が見られた。

〈担当所員の所見〉

本研究は，学習指導要領の趣旨を踏まえ，社会科の資質・能力の確かな育成を図るため，深い学びの実現を目指したものである。「思考力，判断力，表現力等」の育成を研究の中核に据え，概念的な理解の指導の工夫を通して，児童が主体的に問題解決的な学習に取り組む姿を目指している。

社会科における深い学びは，社会的事象の用語や語句などの具体的知識の記憶だけではなく，学んだ知識を構造化して，概念的知識に高めることが大切である。また，思考ツール等を活用することで，思考の可視化や思考を表現しやすくなる効果も検証授業で明らかになっている。さらに，そのことが，学習問題のまとめを児童自身が自分の言葉でまとめるという問題解決的な学習の解決にもつながり，児童の授業に対する意識の変容にもはっきりと表れている。

今後も，本研究が更に充実・深化・発展することを期待しているところである。